地域で働く先輩に学ぼう

玉野高 卒業生招き「職業ガイダンス」

地域で働く先輩に学ぼう―。玉野高は21日、市内や岡山市など身近な地域で活躍する卒業生を講師に「職業ガイダンス」を開いた。生徒たちは先輩の語る社会経験、高校時代の思い出、今後の目標などを通して、自分の将来や働くことの意義について思いを巡らせた。（角南邦彦）

嫌いなことでも一生懸命／周りの助言聞いて／人の喜びがやりがいに

小野さん（右）の話を聞く生徒たち

将来や仕事の意義へ思い

卒業後は進学する生徒が多い同校だが、進路決定に向けて、さらにその先の職業観まで身に付けてもらおうと実施。市職員、美容師、警察官、企業経営者、幼稚園教諭など多彩な職業のOB、OG16人を招待し、1年生142人が受講した。

中国学園大の小野文子子ども学部長（1980年卒）は、ピアニストとしても活動する。高校時代は化学が苦手で、宿題に苦労したことなど打ち明けながら、「社会人になると苦しいことや我慢することも多い。今から考えると、高校での勉強は嫌いなことにも一生懸命に取り組むための訓練だった」と意義を語った。

学生時代のアルバイト、教員採用試験の受験、研究者としての論文執筆など、さまざまな経験があって今の自分が存在すると話し、「百聞は一見にしかず。周りの人の助言を素直に聞き、いろいろなことを経験してほしい」と呼び掛けた。

舞台俳優の四宮貴久さん（95年卒）は、米ブロードウェーの出演経験などを基に表現活動の楽しさや素晴らしさを紹介。「自分が好きなことで、人に喜んでもらえるのが何よりのやりがいになる」と訴えた。また海外で仕事をする上で、コミュニケーションツールとしての英語の大切さも助言した。

将来の目標は教師という田辺樹梨杏さん(15)は「小野さんの『百聞は一見にしかず』という言葉が心に残った。たくさんのことに挑戦したいけど、高校生の今は日々の勉強が全ての基礎になると思うので、しっかり取り組みたい」と話した。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2020年7月22日 山陽新聞朝刊 24ページ